

2.4 「支えられて10周年」



NPO法人富士山測候所を活用する会・理事
江戸川大学名誉教授

土器屋 由紀子

新技術振興渡辺記念会創立35周年を迎えられ、誠におめでとうございます。

思い返すと10年前、貴財団の25周年の記念講演会で、富士山測候所の窮状を訴えて助けていただきましたが、私どものNPO法人「富士山測候所を活用する会」も、何とか活動を続け10周年を迎えております。富士山測候所の庁舎は、当時世界一の性能を誇る富士山レーダーの運用のために建設されたもので、最高技術を集めて造られ、いわば日本の科学技術者の誇りでもあった建物ですが、気象衛星の発達によってレーダーが不要になったことで2004年に無人化され、取り壊しの危機に瀕していました。

しかしながら、PM2.5など越境大気汚染の観測研究に最適な「自由対流圏」の中にあり日本一の素晴らしい観測地点でもあることが分かり、1990年代からその一部を利用していた「大気化学」の研究者たちにとって取り壊しは看過できない事態でした。何とかして観測を続けたいと思い、貴助成金に首都大学東京の梶井克純教授（現京都大学）の「富士山頂を利用した東アジア越境大気汚染監視システムの構築に関する調査研究」で応募させていただきました。そのおかげで、2007年にNPOが山頂の測候所で行った研究活動は予想を上回る成果で、貴財団の報告会でも多くの好意的な質問を頂きました。

ところが、2008年の春先の雪害で送電線を支える電柱12本が被害を受けてしまい、せっかく借用した山頂の施設も2年目は利用できるかどうか危ぶまれる事態が発生しました。そんな折に、貴財団から「何とかしてやろうじゃないか」と委託研究を頂けたことはまさに地獄に仏でございました。測候所を使い続けたい。使えばきっと良い結果が出る。という熱意と信念だけはあっても、世間知らずの研究者の集団であった私たちのNPOが、ここで初めて民間の助成団体の有難さを身に浸みて感じたのでした。なによりも有難かったのは、測候所の

維持管理やそれに係る人件費にも使える懐の深さです。渡辺財団に助けていた
だきながら、他の研究費にも応募して、山頂で行う研究の種類や件数もだんだ
ん増えてきました。

気象庁が管理していた時には使えなかった、宇宙線や放射線、高所医学、永
久凍土などの研究者にとっても富士山頂の素晴らしさがだんだん広がって行
きました。2011年の大震災の折も、観測を続けていたために原発由来の放射
能を含む空気の鉛直分布の測定もできました。最初の5年間共同研究を行った
JAMSTECが組織の変更で共同研究が終了し、2013年NPOは大黒柱を失って危
機を迎えましたが、貴財団の継続援助に加えて、三井物産環境基金が頂けたこ
とで、富士山測候所の灯を消さずに続けられました。

2013年にはユネスコの富士山の世界文化遺産決定がありましたが、その時点
で測候所を利用した活動を続けており、それなりの成果を出していたことが認
められて、NPO活動はマスコミに取り上げられ、いろいろな場面で注目される
ようになりました。これも貴財団のご協力によって出版した「よみがえる富士
山測候所」(成山堂、2012)が、タイミングよく出回っていたことによる影響
が大きかったと思います。

山頂観測10周年を迎え、最近では分野横断的な研究が増え、また、若手の学
会発表賞などが毎年増え続けています。低い気圧による高山病、夏でも零下に
なる気温、強風などの自然条件とも戦いながら、日本一の観測地点、研究拠点
としての素晴らしさは決して減少しないと思います。このように手探りで始め
て、研究者の熱意だけで続けてしまった活動ですが、「今までになかった新しい
研究施設である」という認識が定着しはじめています。

実は、今年も6年間続いた三井物産環境基金の助成が昨年度で終わり、財政的
にピンチでございましたが貴財団により「富士山噴火予知のためのSO₂通年観
測システム構築に関する研究」(プロジェクトリーダー首都大学東京・加藤俊
吾准教授)で調査研究委託を頂きそのおかげで山頂の活動が続けられておりま
す。活動そのものは「歴史ある古い測候所施設」を使っていますが、私たちの
活動の全体を通して「新技術」と
認めて下さった貴財団の卓見に敬
服いたしますとともにそれに支え
られてここまで成長できたことを
感謝申し上げます。

富士山頂にて小型小電力のガスセンサーの
テスト測定を行う
プロジェクトリーダーの加藤俊吾
首都大学東京・准教授

